

---

# 真理のセレナちゃん観察記録！！

RIO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真理のセレナちゃん観察記録！！

### 【Nコード】

N5397L

### 【作者名】

RIO

### 【あらすじ】

あるマンションに住む3人の美少女達、しかしその内の一人朝岡真理は同じ部屋に住むセレナに恋をしている変態だった！！

もう一人の同居人セナも交えて彼女の暴走はさらに大きくなっていく！

## 観察その1（前書き）

こんな感じの話は初挑戦でうまく書けるか判りませんが宜しくおねがいします。

## 観察その1

真理「え〜この物語はこの私、朝岡真理と私の愛すべき人、セレナちゃんの純情ラブストーリーです。私とセレナちゃんの美しくも儂い恋模様をどうかお楽しみに〜！」

セナ「嘘つくな！セレナに付きまとう変態の物語だろうが！みんな騙されるなよ」

真理「ちよつと、セナ〜！いきなり出てきて邪魔しないでよ〜〜！！！」

朝、それは私がもつとも好む時間帯だ。

理由はただ一つ、それはセレナちゃんの寝顔を思う存分に写真におさめることが出来るからだ。

幸いセレナちゃんは起きるのが遅いし、たいがいの事ではまず起きないだろう。

今は五月蠅いヤツもいないし存分にあの愛らしい顔を存分におさめることができる！！

フフ、こんな時のために高性能デジタルカメラを買っておいて正解だったようね。

さあ機は熟した、いざ行かん楽園へと！

そう私がセレナちゃんの部屋のドアに手をかけるのと玄関の扉が開くのはほぼ同時だった。

まったく悪意があると思えない。

なぜ、いざこれからという時に帰ってくるかなコイツは！！

「なんだ、またセレナの部屋に入ろうとしたのか。やめた方がいい

「いよ万が一にでも起こしたりしたら殺されるから靴を脱ぎながら私に背を向け彼女は語る。」

「ウルサイな！あんたの忠告なんか誰が聞くか！！！」

「そう？私は別に良いけどセレナに頼まれてるからな。自分が寝てる時は真理を部屋に入れないようにしてってね」

「ウソ、セレナちゃんがアンタに？」

「まあね。で、どうする？これはセレナの意味でもあるけど」

くっくコイツの言うとおりにするのは癪だけどセレナちゃんに迷惑はかけたくないからな・・・

「っく！わかつたわよ！！入んなきゃいいんでしょ入んなきゃ！！」  
彼女は自分の忠告を聞いてもらい満足したのか一言「まあね」と言いリビングへと上がってきた。

クッくホントむかつくこの女！！何よ自分が一番セレナちゃんの事を理解しているみたいな言い方しやがって！

このいちいち私のやることに文句をつけてくるムカつくヤツがこのマンション最後の同居人セナである。

私たちの関係はまあ、セレナちゃんと糞セナが双子の姉妹私がその二人の姉けん保護者のようなものだ、と言っても私とセレナちゃん達は血縁関係が無いが。

自分で言うのもなんだが、顔は似て無くても三人とも物凄い美少女なのでそこまで怪しまれることはないだろう。

それにしてもセナのヤツホント五月蠅いなどうにか一泡吹かせれないものか・・・。

## 観察その1（後書き）

他の連載もあるので今回の話はなるべく短くなるよう努力したいとおもいます。

グダグダな感じですけど宜しく願います。

## 観察その2

「そういえばさあ、アンタなんでセレナの寝顔なんて撮ろうとしたんだよ？写真なんてそれこそ山ほど持つてるだろアンタなら」

朝食のトーストを口に放り込もうとしたところでセナがそんな質問をしてきた。

狙ってやってるのか？

なんでわざわざ口を開けた瞬間にそんなこときいてくるかな！

あつ、ちなみにこの朝食を用意したのは私ではなくセナである。

っていうか、セレナちゃんは料理作らないし私がやるうとしてもセナがそれを止めるので結局この家で料理を作れるのはセナしかないわけだ。

まあ、別に美味しいから文句はないけど……。

おっと話がそれてしまった。えっと、なんだっけ？

「だから、なんでセレナの写真なんて撮ろうとしたかだよ」

「なっ！なんで私の心の内を！？まさかアンタ人の心を読む能力が……」

「そんなのあるわけないだろ。さっきから一人でぶつぶつ喋ってたよ。真理さあ、思ってる事を口に出すその悪い癖早く直した方が良いや色々困るだろうから」

うう悔しいコイツ二こんな風に何もかも見透かされてるのが！！

ヤバ！私今、顔赤くなってない？

うわ〜恥ずかしい！！！！

「ハア〜、そうやって悶えてるのは勝手だけどそろそろ私の質問に答えてくれないか？」

「ん、ああ写真のこと？そんなの欲しかったからに決まってるじゃ

ん

「欲しかったって、今お前どのくらいセレナの写真持ってるんだ？」  
おっと、これは意外な質問だ。

「あれ？知らないのあれだけ私の部屋に貼ってるのに。見たことない？」

「ああ、お前の部屋は恐ろしくて正直入るきがしない。入ったらなにかにとりつかれそうだ。気が狂いそうになる」

「アンタいくらなんでもそれは酷くない？」

「・・・」

無言かよ！！！！

「まあ良いわ、これ以上言ったら話がまったく進みそうにないしね。写真の数？うーん、正確に数えたことはないけどたぶん五千枚位かな」

「・・・」

あっ、珍しくセナが引きつった顔してる。

「えっと、質問していい？そんだけもっておいて何でさらに写真を？」

「ああ、それは私こんだけセレナちゃんの写真持ってるのにあの子の寝顔の写真はまだ一枚も持ってないのよね。それに今までの写真は全部観賞用だったけど今度は思い切って実戦用の写真を撮ろうかと・・・」

「実戦って？」

「そんな夜のオカズに決まってんじゃない」  
あっ、今度はポーズンとしてる。

やがてセナは深いため息をついた後私に一言、  
「この変態」

とつぶやいた後部屋を出て行った。

「・・・何、何なのよあの態度!! あゝマジム力つく〜!!...!」  
「ううしていつもの様にあわただしく私の朝食は終了した。」

「・・・っていつかセレナちゃんはいつ登場するのよ!...!」

### 観察その3

「今更だけどさあ、あんなんでそんなにセレナに執着してんのさ？ なにか理由とかあんの？」

しばらく部屋に籠っていたセナが戻ってきて最初に口にしたのはそんな質問だった。

「本当に今更なこと聞くのね……。うーん、そうね。まあ、しいてあげるとしたら綺麗だからかな、見た目もそうだけど、そのありかたセレナという存在そのものに私はたぶん心を奪われてしまったんだと思うわ」

「へえー、少し以外だな真理のことだからまた何か変態的な発言をすと思うたのに、こんなにまともな返答がくるなんて。」

「あたりまえでしょ、馬鹿にしないでよね！ どう？ 少しは見直した？」

セナを見返すことが出来、気分良く話す私であったが、次のセナの言葉でそれも一気に砕け去ることになる。

「ああ、喜べよ真理。私の中でたった今お前の位はダンゴ虫同等の存在になったぞ。よかったな、可愛らしい生き物と肩を並べられて。」

「.....」

「どうした真理？ 急に黙って」

「えっと、セナつかぬことをお聞きしますが、今までセナの中で私はどういった風に見られてたのでしょうか？」

「今までってダンゴ虫より前のことか？」

「・・・あつ、はい、そうですね・・・」

「寄生虫かな。セレナにいつもくっついてるし」

即答だった。

「・・・」

「本当にどうしたんだよ真理、さっきから黙って。らしくないぞ」

「あのセナ・・・私泣いていい？」

「はっ？なんで」

「なんでじゃないわよ！！虫あつかいされて気分良いわけないでしょ！それにダンゴ虫あんな害虫の何処がかわいいのよ！！」

「えっ、まるまる所とか？」

「・・・私にはアンタの感性がよく分かん」

そう言い、椅子から立ち上がる。

「どっか行くの？」

「気晴らしに散歩。アンタと会話してたらその内本当に泣かされそうだから」

言いながら玄関のドアを開けると、フラッシュが切れたのはほぼ同時だった。

## 観察その4

太陽は好きだ。

あの温かさと力強さには何ともいえぬ魅力を感じる。

だから私はその太陽少しでも見たいためよく散歩に出かけていた。

今日も同じ、何時もと変わらない散歩になるはずだった。

だけど、玄関を開けた私を待っていたのは何時ものあの温かい光じゃなく、人工的に作られたとても不快な冷たい光だった。

「わ！」

突然視界に光が入ってきたため瞬間的に視力を失いその場にうずくまってしまう。

こうなった場合役に立つのは聴力だ。

耳を澄ますと案の定この場を離れようとする足音を確認できた。

恐らくこれが犯人で間違いないだろう。

「足音からして人数は一人だと思っただけ。どうセナ、あんた見てたんっでしょ」

目を擦りながら事の一部始終を見てただろうセナに聞く。

「ああ、カメラを持ったいかにもストーカーっぽい男が一人いた。たぶんここ数日私たちを付回してたのはあの男だろう」

「まあね、男としてこんな美人を付回したい気持ちも分からなくもないけど」

うん、うんと頷く。

「自分で言っちなよ、そおゆう事は。っで、どうする？」

「どうするって何が？」

「何がってあの男のことだよ、何か手は打たないのか？」

それはセナにしては意外な問いだった。

「別にいいんじゃないの〜あんな小物。私やアンタはもちろんセレナちゃんに危害が加わるなんて事はまずないでしょう。セレナちゃん華奢な体つきしてるけど私たちの仲内で一番強いことはアンタも知ってるでしょ？そんな心配・・・」

「いや、そっちの心配じゃなくて、もしあの男がセレナと接触したらどうなると思う」

「どうって・・・」

嫌な光景が頭をよぎる。

「想像ついた？」

「・・・まあね、こりゃ急いだほうがよさそうね」

しかし数日後、私の頭の中に浮かんだ光景は現実となってしまう。

その日家に帰ると掛けたはずの鍵が開いていた。

中に入ると例の男が腹部から血を流し倒れており、そしてその男の正面にはセナに似た、灰色の瞳をした美しい子が自身の白い髪を赤く染め無表情に男を見下ろしていた。

「・・・おはよう、起きてたんだセレナちゃん」

## 観察その5

それは、傍から見ると異常な光景だったろう。  
一人が死んでいるのだ。

しかも犯人と思われる人物も目の前にいる。

普通の人間ならこの光景に動揺し冷静さを失う。

しかしこの家の住人に限っては残念ながら誰もそのような神経を持ち合わせてはいないようだった。

「・・・おはよう。起きてたんだセレナちゃん」

真理の声の先、男の死体を見下ろすかのような形でその人物は立っていた。

肌は透き通るほど美しく、髪は雪のように白い。

男を見下ろす瞳は人間らしい感情という物がまったくと言っていいほど覗かせない冷たい灰色をしていた。

そしてその瞳が真理の声に反応するようにゆっくりと彼女の方へと向く。

「これやったのセレナちゃん？」

現場を見る限りそうとしか考えられないが念のため聞いておく。

「・・・うん」

答えはまあ、予想していた通りだ。

「急に部屋に入ってきて、五月蠅かったから壊した。でもそのせいで服に血が付いた。真理、新しい服ある？」

セレナの声は美しく、しかしその瞳と同じく恐ろしいほど感情というものが感じられなかった。

大概の者はこの時点で恐怖という感情に体中を支配されてしまうだろう。

だがこれまた残念なことに、真理の体を支配したのは恐怖ではなく、

「もちろんあるわよ！少し待っててね〜！！」  
セレナの服を自分が決められるという喜びだった。

「う〜ん。なにがいいかな？」

セレナに合う服を探すべく家中を駆け回る真理。

もはや死体のことは頭の中に一片も残ってはいないようだ。

「セレナちゃんは何か着たいものとかある？」

「ない。真理が決めて」

「と、言われてもね〜」

（どれもこれも着てほしくて自分じゃなかなか決められないのよね  
え〜）

「あっ、いつそう裸っていう手も・・・」

そこまで言いかけたところで後頭部に衝撃が走る。

「おい、なにやってんの？」

見るとセナが何とも言いがたい笑顔で立っていた。

（アレ？なんかセナさん怒ってる・・・？）

## 観察その5（後書き）

この話の登場人物、異常者が多いいです。  
展開が変な方向に行ってますが、今後もよろしくお願いします。

## 観察その6

頭に走る衝撃、どうやら頭を蹴られたようだ。

ここは文句の一つでも言わなければ気が治まらない。

そう思い振り返ると・・・そこには明らかに不機嫌な顔をしたセナが立っていた。

不味い、これはかなりお怒りのようだ。

「あの～もしかしてセナ何か怒ってる？」

「・・・」

返ってくるのは無言の返答。

ああ、間違いなくこれは怒ってる。

問題はその理由だが・・・

「ちょっと黙ってちゃ分かんないでしょ。子供じゃないんだから理由くらい言いなさいよ」

「・・・理由？この状況で私はお前に理由を言わなきゃならないのか？」

うっ、まずい何故だか判らないけど、セナの瞳から急速に感情が失われていく。

まるでゴミでも見るかのような目だ。

一応言っておくが、私はMでは無いのでそんな視線で感じることはない。

まあ、これがセレナちゃんの場合は別だが・・・。

そんな考えが顔にでたのか、

「オイ、人が真剣に話しているのに、なにニヤニヤしているんだお前は」

と指摘され

「えっ！？あつ、別にセレナちゃんに苛めらる想像なんかしてないからね！！」

つい自ら墓穴を掘ってしまう。

「想像してたんだな・・・」

「・・・ハイ（涙）」

そう語る私を見るセナの顔からは怒りは消え変わりに可愛そうなもの見るような目をこちらに向けてくる。

そんな真面目に怒ってもらうこともされない自分が悲しくまた泣きそうになる。

くっ！このままじゃ駄目だ。

このままじゃ物凄く駄目なヤツというレッテルを張られそうな気がする。

これならまださっきの空気の方がましだ。

そのためには少々危険な気がするがあの質問をするしかないだろう。心を決め再び話を振り替えるために質問を投げかける。

「でっ、セナ。結局怒ってた理由てなんなの？」

## 観察その7

「ここにきて話を蒸し返すとはね。そして怒られる理由はいまだわからない。そういった所は流石と言つべきかな真理？」  
にこりと笑うセナ。

その笑顔の下に隠されている怒りに普通は気づくところだが、  
「いや〜流石だなんて」  
真理はどうやら普通ではなかったようだ。

「真理一応言っておくが、私は別にお前のことを褒めたわけではないからな」

セナの当たり前前の一言、しかしそれにガンとオーバーリアクションをしながらシヨックを受ける真理そんな下手な漫才のようなやり取りをセレナは感情のない瞳で眺めている。  
セレナにしてみればこんなやりとりも日常なのだろう。

「え〜褒めたんじゃないの？ だったら流石なんて言わないでよ、勘違いするじゃない」

セナの言い方にぶんすか抗議の声を上げる真理。  
そんな真理の姿に頭を抱えだすセナ。  
恐らくは色々と思うことがあるのだろう。

「あのな〜あの状況で私がお前のことを褒めるなんて事があるわけないだろ。とゆうか褒められるか！ なんだよあそこに転がっている死体は！そして何故お前はそれをスルーしてるんだ」

ここにきてようやくセナの怒りの理由が解かり安堵すると同時に自分がつつかり死体の存在を忘れていたことに気づく。  
たしかにセナも怒るわけだ。

クソ、あそこでセレナちゃんのお着替えなんてトラップさえなければ……。

……まあ、過去を悔いるのはこの辺までとしてこの状況どうした  
ものか……。

うん、しかし何故私は毎度こんな状況におちいるのだろうか？

## 観察その8

「まーま。そう怒らないでよカルシウム足りてる？あつ、ほら牛乳あるけど」

「いるかー!」

わざとらしく牛乳を掲げてみたりするが効果はなし。

うーんどうしよう。

・・・って、あれ？

なんか知らないけど、セナの右手になにか光るものが見える。なんか嫌な予感。

「あの、つかぬことを聞きますがセナさん。その右手に持っている物はなんでしょうか？」

「うん？見てわからないか、これは包丁だ。今からこれを使ってお前をさばこうと思う」

まるで魚をさばくのだと言ってるような軽さ。

そして口元に浮かべる薄ら笑み。

その二つの恐怖が混ざることによって、寒気のような戦慄が背中を駆け上る。

「いやいやいや。それシャレになんないって！まず落ち着こう。ねえ」

「大丈夫だ、別に殺すわけじゃない。ただ少し痛い目にあってもらおうと思って。ほら動物を調教するときは多少の暴力も必要だろ？」

「ちょ、調教だー!」

「いつたい何時からこの娘はこんなにもドSに目覚めてしまったのだい。」

「さっ動くな。動くとも余計痛いからな」

「あわわわ」

壁際に追い込まれもはや逃げるすべはない。

唯一の救いであるセレナちゃんもいつのまにか寝ているし。

ああ、それにしても可愛い寝顔だな。

って言ってる場合じゃないし、この状況なんとかしないと命にかかわる。

どンドン迫ってくる包丁。

ヤバイこれはマジで。

あと10cm。

鋭利な切っ先はもう目と鼻の先だ。

あと、5cm。

もうだめだと目を瞑る。

そこでやっと天は私に味方したようだ。

開け放たれるドア。

眩しい光とともにその男はやって来た。

## 観察その8（後書き）

おそらく次回で最終話となります。

観察その9 (前書き)

最終回です。

## 観察その9

「！！ちよと、何やってるんですか」

この部屋に居ない第三者の声、それに反応し目前まで迫っていたセナの腕が止まる。

「シン？」

開け開かれた玄関のドア。

差し込む光を背にし、その男シンは驚きの形相をあらわにしていた。  
・・・まあ、当然といえば当然か。

シンが現れ落ち着いたセナをふまえて今までの説明をすること15分私話を終始真剣な眼差しで聞いていたシンが最初に漏らした言葉はため息だった。

「ムツ、何よ私を見てため息なんかして。私が悪いとでも言うの？」

「当たり前です。まあ、本当はこの男を殺してしまったセレナさんが一番悪いんでしょうけど、あの人にそんなことを言っても無駄でしょうから一番悪いのは真理さんです」

「なっ、何だよその理論まったく納得できないんだけど」

「納得はしなくていいですよ。もうこれは決定事項ですから」  
満面の笑顔で答えるシン。

思うのだがコイツはたぶんセナ以上に私との相性は最悪だと思う。

「で、今日は何しに来たんだお前は」

と、今まで沈黙をとおしてきたセナが突如声をあげた。

「・・・はて、僕はただ皆さんがうまく暮らしていけるかどうか心配で見に来ただけですが」

「とぼけるなお前が私たちの所に来たということは何かしらの命令があるんだろ？」

セナのその言葉に気づく。

そういえばそうだった。

いままで用もないのにこの男がここに来たことはない、来るときはきまって上のやつが命令を知らせにくるときだ。

「さすがですね。まあそのとおりなんですけど」

「で、内容は」

「はい、あなたたちにはこの地を去ってもらい別の土地に移ってもらいます。内容は私もまだ知らないので言えませんが、取りあえず今から引越してください」

「はい？」

突然のことについて間抜けな声をあげてしまう。

「聞き取れませんでしたか？」

「いや、聞き取れはしたけどそんな突然。．．．こつちも予定つてもんがあるし、それに私が納得してもセレナちゃんやセナが納得するかどうか」

「ああそれなら心配はむようなようですよ。ほら」

シンが指差す方向そこには早くも荷造りを終え玄関へと向かう二人の姿が。

「つて、行動早！それにセレナちゃん何時の間にか起きたの」

「さつき」

「つてゆうか、アンタ達はそれでいいわけ？こんな急に引越しながら」

「ああ、別にここに思入れがあるわけじゃないしな。それよりシン新しく住む所つてどんな所なんだ？」

「ええ、大きな時計塔のある美しい町ですよ」

「ふん、まあ楽しみにしとくか。じゃあ、真理そうゆうとだから残りの荷物よろしくな、私とセレナさきに行っているから」

手を振りながらスタスタと出ていくセナそのあまりの行動の速さに文句を言うことさえも忘れてしまった。

「．．．．」

あまりに急激な展開に頭がついてこない。

ふと横をみるとセレナちゃんが立っている。

ああ、こんなに頭が混乱しててもやっぱり可愛い。

「真理。頑張つて」

そう一言いいセナと同じように部屋を後にするセレナちゃん。

やっぱり手伝ってはくれないだね。

「じゃあ真理さん後のことよろしくお願いします。あとあの死体はこちらで片付けますので」

そう告げると新しい土地の住所らしきものをおきシンも部屋をあとにする。

完全な一人ぼっち。

誰もいない部屋。

そんな中、ふらつく足取りで一人悲しい荷造りを始めることにした。断言しよう今日は人生最大の厄日だと。

え、これで終わり？

いや無理だからこんな終わり方認めないからね！

意地でも続きつくるから！！！！

## 観察その9（後書き）

取り合えず真理のセレナちゃん観察日記はこれで完結です。

最後まででくださいません。

ただ物語の最後で真理が言ってるように真理の物語はまだ終わりません。

新しい話も近いうちに掲載しようと思っているのでよろしかったらそちらも宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5397/>

---

真理のセレナちゃん観察記録！！

2010年11月10日22時46分発行